

## 新刊紹介

### 佐藤章編『統治者と国家—アフリカの個人支配再考』

佐藤 章



アジア経済研究所  
2007年

大統領、首相、国王といった統治者（*one*）は、国家運営の実務を統括する最高執行権者であると同時に、国内の社会統合を体現し、国際社会において国家を代表するシンボルとしての役割をはたしている。また、権力の座をめぐる争奪戦である政治生活の焦点をなしている。国家と政治のあり方を大きく決定づける存在である統治者は、同時代に生きる組織、集団、個人の利害やあり方に深く関わりをもち、それゆえに、つ

ねに大きな関心を引きつけてやまない。

このことは、サハラ以南アフリカ（以下アフリカ）でも変わらない。二〇世紀にアフリカでは四九の独立国（現存の四八の主権国家と、一九六〇年代に短期間だけ主権国家だったザンジバル）が存在し、二〇〇六年一月までに登場した統治者はじつに二四二人をかぞえる。大統領、首相、国王、唯一党のトップ、軍事政権首班など身分や肩書きはさまざまであるが、これら統治者の経歴、政権掌握にいたる経緯、イデオロギ、政策、政治手腕、権力基盤、制度との関係、歴史的意義などは、アフリカの国家と政治を理解するうえで不可欠の研究テーマである。

アフリカの統治者研究では、一八八〇年代に提唱された「個人支配」概念に基づく研究が重要である（Robert Jackson and Carl Rosberg, *Personal Rule in Black Africa*, University of California Press, 1982）。この研究は、アフリカの多くの国々において政治は制度化されたシステムにのっとっていないが、だからといってそれを十分に確立された政治秩序からの逸脱としてとらえるのではなく、クーデタ、陰謀、クライアンテリズム、腐敗、派閥主義等々を構成要素としてもつ、特徴的な政治システムとしてとらえるべきだと提唱する。この認識にもとづき、制度によってではなく、政治家たち自身によって構造化されている、統治者

と寡頭支配層を関係づけるシステムが「個人支配」とされる。この研究は、制度化された側面と非公式な側面の二重性を強調する、一九八〇年代以降一般的になったアフリカ国家観のはしりともいえ、今日なお一定の有効性をもっている。

しかし、「個人支配」概念が提唱されてから、すでに四半世紀が経過した。それ以後に登場した統治者をあらたに考慮の対象に取りこみながら、「個人支配」概念を再吟味し、そこで扱われなかった論点を意欲的に探索する必要があるのではないか。このような基本的な問題意識にもとづいて、二〇〇五年度から二年間にわたり実施された「アフリカの個人支配再考」研究会の成果が本書である。

アフリカの統治者は数が多いこともあり、知名度の高いく一部は統治者を除いて、基本的情報をえるのすら困難である。本書ではこの研究状況に鑑み、全二四二人、返り咲きを含めたのべ二六五代の統治すべてに関して、統治者名、生没年、肩書き・称号、おもな経歴、就任時点、就任・留任の状況、終了時点、終了の経緯をまとめた網羅的な一覧表を作成した（巻末資料、編者作成）。これは世界的にみても、類似の試みが近年絶えてなかったものであり、本書の大きな成果のひとつといえる。また、「個人支配」研究を例外として、先行研究が豊かとはいえない状況に照らし、本書所収の六篇の事

例研究は、政治学、地域研究、人類学とそれぞれ異なる見地から、統治者研究の可能性を自由かつ野心的に探っている。所収論文は、ナイジェリアの計八代の軍人指導者を対象とした個人支配の様態の分析（第一章、落合雄彦論文）、ケニアでの憲法見直しプロセスを題材とした、権力闘争と制度的側面の関連の分析（第三章、津田みわ論文）、ソマリアにおける崩壊国家状況と、それに先行したシアド・バーレ政権の関係性を、おもに社会統合や歴史認識の側面から探った分析（第四章、遠藤貢論文）、南スーダンのリーダーとして囑望されながら二〇〇五年に急死したジョン・ガランの人と経歴に関する研究（第五章、栗本英世論文）、ジェノサイドを稼働させたパトリック・クライアント・ネットワークの綿密な分析を通じた、ルワンダのハビヤリマナ大統領の政治体制の分析（第六章、武内進一論文）、村落部における統治イデオロギーの受容のあり方からみる、コートディヴオワールのウフェロボワニ大統領の統治に関するあたらしい視座の提示（第七章、真島一郎論文）、である。いずれも、対象国に関する深い知識に裏打ちされた、読みごたえのある統治者論となっている。アフリカ政治に関心のある方はもちろんのこと、他の地域を専門とする方もぜひ手にとっていただければ幸いである。

（さとう あきら／アジア経済研究所地域研究センター）